

## 早稲田大学

南開大学

今回の最後の訪問先は楽しみにしていた早稲田大学だった。優秀な日本の大学生とフェイスツーフェイスの交流のできる貴重な機会を得たが、それは今回の訪日全体の総まとめ、或いは一つの昇華の形であったと言える。早稲田大学が日本でも有名な私立の総合大学であり、世界でも有数の大学の一つであることは知っていた。早稲田大学の歴史を振り返れば、その田園を思わせる校名の由来は、まさに二束の稲穂の間に「大学」の二文字がデザインされたその校章の図案が示すように、決して繁華な都市に創設されたものでないことを表している。その前身は東京専門学校といった。早稲田大学は「学問の独立を全うし、学問の活用を効し、模範国民を造就する」を建学の本旨としているが、この優れた学風は創設者の大隈重信以来、歴代総長の薫陶と教師や学生たちの奮闘により代々伝えられ、発揚されてきた。

1882年「学問の独立を全うする」という宣言とともに、明治時代の有名な政治家で自由民権主義者であった大隈重信が、東京郊外の一面の稲田の中に東京専門学校を創設した。当時の国内政治における党派闘争の関係で、大隈重信の立場では自ら学校運営を行うことができなかつたために、大隈英磨が総長に就任した。当時は政治経済、法律、理学、英語の4つの専攻しかなく、小規模で施設も極めて粗末な学校であった。

1902年の創立20周年を機に正式に早稲田大学と改称された。その後の関東大震災と第二次世界大戦で早稲田大学も深刻な被害を受けたが、粘り強い学校運営が続けられた。

第二次世界大戦終了後、戦時には止められていた新入生の募集が可能になり、規模が大幅に拡大されることになった。新学制の下、早稲田大学は戦後の経済復興のニーズに応えるために、全日制学生の受け入れ規模を拡大すると同時に、夜間や通信教育コースも設けていった。大学院教育も充実し、多くの学部・学科に博士課程が設けられるようになった。学内の機構もそれに応じて拡充され、体育局や国際部を設けて国際交流と留学生の派遣と受け入れを強化していった。また、様々な研究所も次々に設立された。

創立者の大隈重信は先見の明のある教育者で、その学校運営のための原則と精神は現在まで貫かれ、「学問の独創性」、「知識の実用性」、「模範的な日本国民と世界市民の育成」が建学の本旨になっている。

大隈重信が提唱した「在野精神、進取精神、庶民精神」により、早稲田はエリートや指導者だけでなく、多くの実務に長けた人材を養成してきた。

大隈重信の建学に当たっての究極の目標は「世界の早稲田」であった。早稲田大学は早い時期から欧米の学術文化を吸収し、アジア各国に向けてその門戸を開放した。各国の留学生の受け入れでは、日本の大学の中でも常に先頭を歩んできた。

早稲田大学は100年余の歴史を経て、今や整備された総合大学となり、5万人超の学生が9つの極めて個性的な学部及び12の大学院で学んでいる。学内には近代的な施設だけでな

く、百年来蓄積してきた豊かな人文資源があり、名実ともに日本の「私学の雄」となっている。

早稲田大学の本部キャンパスは東京都都心の新宿にあり、主な学部と運営機構がここに設置されている。その他にも戸山、大久保、所沢、本庄などの 9 キャンパスがある。各キャンパスには関連学部の教育・科研施設が設けられているが、本部キャンパスには大隈講堂、演劇博物館、井深大記念ホール（国際会議場）、新設の総合情報センターなど早稲田大学の歴史と特色を反映した建築物がある。

また、早稲田大学には中央図書館を中心に合計 30 ヶ所の図書館があり、蔵書数約 450 万冊、利用者延べ 180 万人、多くの国宝級の図書も蔵書されている。

なお、早稲田大学は個性を尊重し、「自由な学風」を尊ぶ総合大学であり、世界各地からの異なる肌の色をした、様々な言語を話す多くの留学生に会うことができる。また、森喜朗、小渕、竹下、海部など日本の歴代首相を輩出し、日本の国会には 100 名近くの「稲門会」と呼ばれる同窓会組織がある。企業家では、松下電器やソニーの創業者が名を連ね、上場企業の社長では早稲田大学出身者が最も多く、村上春樹などの有名な作家、芸術家、建築家、マスコミ界の有力者など枚挙にいとまがない。「早稲田大学出身者が日本の世論ツールを掌握している」と言う人さえいる。

こうした古い歴史のある、優れた大学を見学できたことは、私たちにとって本当に嬉しいことであった。早稲田大学に到着後はキャンパスを簡単に見学したが、早稲田大学は周囲の環境によく溶け込んでいた。大学の正門は大きな鉄門があるわけではなく、道路脇に石段が一段あるだけの完全開放型の校門がせいせいした感じで良かった。しかも秋のキャンパスは格別の雰囲気、一面の落葉と気落ちの良い秋風が大学の洋風建築とマッチし、セピア色の詩情溢れる美しさに包まれていた。特に大隈広場にある大隈講堂は荘厳さと厳粛さに満ちていた。この講堂は創始者の大隈重信を記念して建てられたものだが、その独特な外観が早稲田大学のシンボルになっている。それは伝統的な左右対称ではなく、非対称の形式が採られていた。講堂の脇に時計台があるが、それには個性と自由を強調する意味が込められ、大隈の学問の独立と独創性を探求する精神に呼応したものになっている。なお、周囲の環境に溶け込むように、広場前の大きな通りも講堂の真正面ではなく、斜めになっていた。

キャンパス見学後は、学生たちと「学習と就職」をテーマで交流が行われた。短い時間ではあったが内容の濃い交流で、中国と日本の大学生にはいろいろな面で違うことが分かった。例えば、日本の大学生の多くは卒業後、すぐに企業に就職することを選択する。中国の学生は学部卒業後に大学院進学を選ぶ傾向にあるが、日本の学生は卒業後すぐに就職し、数年働いた後に大学に戻って大学院で学ぶかどうかを考えるようだ。また大きな相違点としては、日本の大学生の職業選択に当たっての態度が挙げられる。彼らの話によれば、日本の大学生は「人」をその職業選択の際の第一指標とする、つまりその会社の社長がどういう「人」なのかを見ると言う。次に重視するのが個人的な興味と仕事の環境で、最後に給与や報酬の額を考えるということだった。この点は中国の国情と多少違いが

あるように思われた。また、学生生活についても話したが、日本の大学生のほうが独立していて自主性が強く、中国の大学生よりも勉強以外の楽しみが多く、中国が今進めている資質教育により近い教育のような気がした。中国が今行っている教育改革が功を奏するためには、まだ長い期間がかかるように思われる。時間の都合で、中日両国の大学生の勉強と就職についての交流は適当なところで終了したが、次の夕食会でまた自由な雰囲気の中で食事をしながら交流することができた。

その中で最も印象深かったものは早稲田大学の自動図書館だった。彼たちの話によると、日本は地震が多いので、人身の安全を保障するために、国の規定では建物の地下 2 階以下に常時人がいるような設計ができないようになっていることから、早大図書館の地下書庫にはピッキングシステムが採用されており、コンピュータ上で必要な書籍名を入力するだけで、地下書庫のロボットが自動的に本を取り出してくれるという。しかも、この先進技術はまさに目下研究の焦点になっている人工知能だという。まったく初めて聞くことばかりだった。

今年ちょうど早稲田大学の創立 125 周年だが、そもそもこの 125 周年にはもう一つの意味がある。創立者の大隈重信には「人は 125 歳まで生きる」という持説があった。この「人は本来、125 歳までの寿命を有している。適当なる撰生をもってすれば、この天寿をまっとうできる」という理論の根拠は、「生理学者の説によると凡ての動物は成長期の 5 倍の生存力を有するというものである。そこで人間の成熟期をおよそ 25 歳として、その 5 倍、即ち 125 歳まで生きられる」（大隈重信述「人壽百歳以上」から抜粋）。大隈重信のこの「人生 125 歳説」は高く評価され、その当時の雑誌に何度も紹介された。したがって、早稲田大学と大隈重信に関する記念行事においては、この「125」という数字が新時代を代表するものとして重視されている。創立 45 周年の時に建てられた大隈講堂の塔の高さは 125 尺（約 38m）に設計され、1963 年には大隈重信の生誕 125 周年記念活動が行われている。しかも聞くところでは、早稲田大学は創立 125 周年に「第二の建学」を打ち出され、将来を見据えた「国際人を育成するグローバル・ユニバーシティ」という壮大な目標を掲げ、入念な計画を進めているという。創立 100 周年記念の時には、西原春夫総長によって 21 世紀に向けての青写真が打ち出され、国際化・情報化時代に対応した教育及び研究体制が提起され、早稲田大学にとっての「第二の世紀」の幕が開かれたことが宣言された。

2007 年の創立 125 周年では、第二の建学——国際的な大学になるための「第二の世紀宣言」、即ち「地球市民の育成、独創的な先端研究への挑戦、全学を社会のための生涯学習機関として提供すること」が打ち出され、目下、大学側は次のような一連の改革を行っている。即ち、単位制を実施し、柔軟かつ多様な学習方式により活きた学問をする。体育局を設立して全校の体育課程を一元的に管理し、心身の調和のとれた学生を育成する。演劇博物館などの施設を利用し、情操及び芸術面の才能を育成し、学校生活を豊かなものにする。図書館機能を十分に発掘し、それが真に「教室」としての役割を果たすことができるようにする。入学試験制度を改革し、学業が優秀で、全面的に発達した学生を募集する以外に、一芸に秀でた学生を受け入れるようにする。様々なルートからの推薦と試験を統合させた

募集方法により、これまでの「一回の試験で一生が決まる」という方法を改める。それ以外にも、帰国子女、外国人学生、スポーツエリートについても柔軟な受け入れ措置が講じられている。

早稲田大学で私が最も気に入った点は、あの「庶民的」な学風だった。早稲田大学は100年余りを経ても、大隈重信の提唱した3つの精神——在野精神、進取精神、庶民精神が継承されており、以下のような「開放」措置によって独自のスタイルができています。①教育の開放：縦横にクロスした学習機会を提供し、徐々に専門性を深めていく開放的教育を提唱している。個性を大事にすると同時に、融合と開放が強調されている。2002年現在、約1,000課程で開放教育が行なわれ、すべての学部生が自由に聴講できるようになっている。②キャンパスの開放：早稲田大学には塀が無く、誰でも見学に訪れ、場所を借りて会議まで行うこともできる。隣人を友として仲良くつきあうというのが、早稲田大学が100数十年大事にしてきた庶民的スタイルである。同時に早稲田大学の学生もしばしば周辺コミュニティーの各種活動に参加している。③世界に向けた開放：国際的な視野を持った「世界市民」を育成するために、世界的な人材ネットワークを構築している。早稲田大学は毎年海外に各種留学生約600名を派遣すると同時に、日本の私立大学としてはトップレベルの約1,300名の海外留学生を受け入れている。目下、同校には海外派遣留学生数を全校学生の30%にするという計画がある。④「東西文明の調和」：これは大隈重信の高い見識によるもう一つの建学理念である。早稲田大学は最も早い時期に欧米の学術文化を吸収し、アジア各国に向けて門戸を開放した大学である。早稲田大学には世界の14の国と地域の87校から1,000人の留学生が来ており、その数は日本の大学の中でも屈指である。それと同時に国際交流活動にも常に積極的に取り組んできた。これまでアインシュタイン、バーナード・ショー、江沢民、クリントン、金泳三などの有名人や国家元首が訪れているが、これらの世界的著名人の来訪により早稲田大学の国際化に向けた教育への取り組みが推進されている。

早稲田大学の学生に中国の印象について尋ねてみたが、彼らの中国観が非常に現実的なものであることに驚かされた。しかも中国についての理解が非常に深く、中国と早稲田大学の交流についても興味深げに話していた。早稲田大学と中国はかなり早い時期から文化交流活動を始めており、1905年には早稲田大学内に清国留学生部が設置され、最初の年に受け入れた中国留学生は762名で、日本の各大学の中で最も多かったという。また、最も忘れられない出来事としては、1999年に江沢民総書記があの大隈講堂で行った「歴史を鏡とし、未来を切り開こう」という重要な講演があるとも言っていた。現在、早稲田大学は北京大学、復旦大学、南開大学、上海交通大学と学術交流関係を確立している。

ゆっくりと時間が流れ、早稲田大学の訪問も終了の時間が近づいていたが、今回の交流の意義は到底言葉では表わせないと思った。それは中国と日本の一流大学の学生同士によるフェイスツーフェイスの対話であり、双方の学生生活や考え方が理解できたと同時に、おそらく今回の交流は中日両国の将来にとって有益だったのではないかと思う。私たちはいずれも中日両国の将来を支える力であり、こうした交流を通じて相互理解を深め、様々な疑念や誤解を解消することは、中日関係の発展を大きく利するものだと思う。

今回、大変意義のある訪日の機会が得られたことは本当に嬉しいことであり、また微力ながら中日友好のために自分なりに頑張ったつもりだ。最後に早稲田大学の優秀な学生たちに感謝すると同時に、今回のこの貴重な機会をつくってくれた日中経済協会と日本商會に感謝し、中国と日本の友好に関心を寄せる全ての友にお礼を言いたいと思う。

2007年12月17日